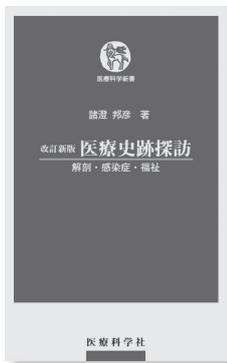


改訂新版 医療史跡探訪

—解剖・感染症・福祉—

著者：諸澄邦彦



本書は医療科学社から2016年に発行された「医療史跡探訪—医学史を歩く—」の改訂版である。「あっ」と思われた読者の方も多しと思われるが、本誌では馴染み深いタイトルで、現在も連載されている人気コラムを再編集したものである。改訂新版とは言え、前版から追加された記事も多く、読者にとっては新たな発見も多

い。ただ、本書をここで紹介することは非常に困難である。なぜなら、本誌の連載コラムであることに加え、*Isotope News* No.752 (2017年8月号)にて前版が紹介されている。つまり、この書籍の概要や価値、社会的な意味だけでなく内容までもご存知な本誌読者に対して何を紹介できるのか？と悩むことになった。そこで、筆者からは本書の楽しみ方の1つを提案したいと思い、筆を進めることにした。

本書を手に取り、初めて目を通した時にある違和感を覚えた。それは、このような探訪記に必ずと言って良いほど付いている「あるもの」が本書には付いていないからである。筆者はつい最近ある探訪記の出版に関わった。それは、国際協力を行っているNPO法人の活動とその中心となった女性の半生を探訪記風に書かれたもので、その冒頭にも「それ」があった。カンの良い読者は気づいたと思うが、「それ」とは『地図』である。多くの探訪記には探訪先がプロットされた地図が付いている。しかし、本書にはそのような地図が無い。少し話が逸れるが、大学で授業をしていると、よく「先生、今の授業のスライドを資料として配布してください」と言われたり、授業評価等では「スライド資料が配布されなかった」といった意見を頂戴したりする。そのような学生に対して「スライド資料を配布することは、みなさんが授業中にノートを取る機会を奪うことになる。つまり、学習の機

会を奪うので配布しません」と伝えることが多い。まさに本書に地図が無いのは、読者から「楽しみ」という機会を奪うことになると思われ、著者がわざと付けなかった、つまり、探訪記の「楽しみ方」を著者が残してくれていると勝手に解釈している。

そこで、筆者が提案する「楽しみ方の1つ」だが、本書をザッと通読した後に日本地図を片手に紹介されている場所を白地図にプロットするところから始める。本書には紹介されている場所の住所等が掲載されているので、それを参考に検索すれば良い。恥ずかしながら筆者の場合、知らない地名や間違えて覚えていた場所もあった。最近は地図アプリ等を使ってインターネット上で比較的容易に周辺の状態を画像(写真)で見ることができる。ここまでの作業で何だか旅をしたような気持ちになれるので不思議である。後は読者の好み次第だが、しっかりと本書の内容を読み、先人達の苦労や熱意に思いを馳せれば、そこに別の印を入れるのも良いかと思う。筆者の場合、深く読むほど「実際に行ってみよう」と思うようになったので、少し時間をかけて楽しみたい、実際に紹介されている場所を訪れたら別の印を入れたいと考えている。本書で紹介されている場所は比較的、関東(特に東京近郊)が多いので、関東地方に在住されている方や東京近郊への出張が多い方は、この「スタンプラリー」も進みが早いと思われる。それ以外にも本書には掲載されていない別の史跡等を自分で調べ、その場所にプロットを加え、より深い自分だけの地図を作成するのも楽しいと思う。時間とお金に余裕がある方は世界地図バージョンを作成してみてもいかがでしょうか？

最後に1つ、前版の紹介記事にも書かれている内容をあえて今回も書かせていただく。この書籍は医療や科学技術の発展の裏にある「負の遺産」についても多くの紙面を割いて紹介されている。このような史実を見聞きする場合、「昔は酷かった」と思うだけでなく、「当時はこれが普通だったのかも」と考える必要がある。逆に、現在我々が普通だと思っていることが将来は「酷いこと」と認識される可能性もある。もちろん未来のことは分からないし、知ることはできない。ただ、様々な進歩は「これで良いのか？」と疑問を持つことがきっかけであり、これを問い続ける必要がある。本書はその重要性を認識させてもらえる1冊で、医療に携わる、もしくは今後携わる予定の方はもちろん、科学技術の発展の恩恵を受けるあらゆる方に読んでいただきたい書籍である。

(関 健介 杏林大学 保健学部 診療放射線技術学科)

(ISBN : 978-4-86003-506-8, 264 頁, 1,650 円 (本体 1,500 円 + 税 10 %), 医療科学社, <http://www.iryokagaku.co.jp/>, 2024 年)